

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十一年八月廿日印刷納本 昭和二十一年九月一日發行

第十二卷 第四號

淨

土



宗教とその變質

蓮の花

阿彌陀佛は何處に在るか

小説ひがみ

眞野正順

吉田絃二郎

中村辨康

瀧川駿二

八・九月合併號



宗教とその變質

眞 野 正 順

(I)

社會が大きく變動してゆく時には、ひとつの理想を伴ふ宗教的情熱が生じ、民衆はあたかも巨濤にのせられた木片の如く強く押し進められてゆくものである。

然し、その宗教的情熱が正當なる出所^{でどころ}によらずして現はれる時には、その感激は、一時いかに強烈にかつ純粹であつても、斷片的であつて、やがて消え、理想は忽ちあらぬものに變質し、墮落してしまふものである。

今は、おどましき惡夢の如く思ひかへされる、昨日のあの偏狂なる皇道主義にしてさへ、その發端においては、國家の前途に對する一の理想を伴ふ宗教的情熱を具へておつたのは事實である。又それなればこそ、兎にも角にも若干の期間のあいだ、ひたむきにして純なる我國民の大部を掴み、これを驅り立てることが出来たのであらう。

これは、當時切迫し來つた國內外の窮迫せる狀勢を打破して新たなる世界を國民の前にひらくが如き觀をもつてゐ

た。さしも華かなりしこの國の資本主義もすでに梗塞の狀態に達し、これに對抗する社會主義運動もいたずらに觀念的に固化して其役を爲さざるに當つて、當時新興の魅力深かつたナチスの聲に倣ふて、一國內における全體社會主義の實現を呼稱し、直接には純朴なる少壯軍人と農民の一部を主體とし、腐敗せる財閥政黨を打破の對象として現はれた此運動は、何か世人の心を索くものあるやうに思はれた。そして、更に、その上に、久しく抑壓せられた東方精神の伸長、後進諸民族の解放等の理想をかぞへ、國民をあげて一の精神的結合體とし、個人は喜んでそれに自己を犠牲として捧げゆくべき永遠の聖共同體なりと主張するに及んで、一つの宗教的色彩を帯び來つたのであるが、更にこの傾向に拍車をかける爲に、民族の古代神話が取上げられ、國民の唯一宗教として強要せられ、然もその解釋には、徳川鎖國時代の空氣の中に成立せる極めて狹量なる平田神道がオーソドックスとして採用せられ、その獨尊的な

る征服的世界觀が高調せられたのは、人の記憶に新なるところであらう。かくて掻立てられた民族的情熱は、不氣味なる宗教的壓力を帯びて、雪崩のごとき其の運動を開始したのであつた。

然しながら、この場合、興奮せしめられた宗教的情熱は、決して宗教の正當な出所と軌道とによつたものではなかつた。云はゞ、一の政治目的のために手段として呼込まれた急造宗教にすぎなかつた。

かゝる、正しき軌道によらざる宗教的情熱は、たとひ一時はいかに熾烈にかつ純粹に見えても、極めて斷片的であつて、忽ち消え、消ゆると共に—更に悪いことには—かつてそれが携へてゐた所の理想の香氣をも併せて喪失し、その底部に潜む利己的慾情を太々しく露出させてくるのである。一たび宗教を経験した後、それを喪失したるものゝ慾情の發露は無恥無慚に奔り易い。けだし、天地の至情と共に良心をも併せて喪失するからであらう。

(II)

昭和維新はその革命と成功と共に、忽ち變質しはじめた。實權がその掌中に落つると共に、博大にして犠牲的な宗教的心情は烟のごとく消えて、底部に潜んでゐたところの利己的權勢慾が太々しく擡頭し、かつての理想は、その慾情の趣くがまゝに變質し墮落せしめられて行つた。

即ち、一國內に閉鎖的な理想態は、極端なる獨尊主義へと移行し、國家社會主義は、その平等の一面を喪失してたゞ威力のために奉仕する官僚的階級主義に變じ、嘗て呼唱されし精神的結合體は、その精神の自由を閉塞されて、たゞ其精神を把握せりと自負する者流の朋黨的專制となり、また個人がその身命を捧ぐべしとせられた聖共同體は、たゞ無條件的服従のみが強要せらるる壓制國家と變じた。さうしてかゝる社會を不自然に強ひて維持して行くがために暴力と猜疑が横行し、やがて憎惡と破壊との司配する世界へと突入するを留め得なかつた。さうして嘗て謳歌せられた東亞共榮圈は東亞征服圈と變じ、遂に劣惡目を蔽ふべき今次大戰へと自ら突進して行つたのである。

(III)

宗教的感情は、これを譬ふれば高貴なる藥品のごとき一面をもつ。それははげしき威力を持つが故に、夫れによつて却てまた人をあやまらすのである。

社會が、その理想を實現してゆくためには必ずや民衆の中に高貴なる宗教心の興起することを必要とする。人はそれに依つて、自己の利害を忘れて理想に向つて全身を投げることが出来るからである。然しながら、この場合、その宗教心は、社會運動の高潮と共に自然本能的に民衆の中に誘發されてくるやうな偶發的な宗教感情であつてはなら

ぬ。またかゝる運動の政治的手段として民衆に押附けられる作爲的宗教であつてはならぬ。かゝる宗教は云はゞ「まぐれ咲の花」にすぎない。その素質において不良であり、その發育において不完である——極めて畸形的なる宗教の發現にすぎない。従てたとひ一時はいかに強烈であつてもまた斷片的にして消へ、怖るべき變質と禍害とを残すことは我等のつぶさに體驗して來たごとくである。

眞に社會の理想を遂げしむるに足る健全なる宗教心は、宗教の本然の出所^{でところ}によつて現れ來るところの宗教——云はば「公路」によるところの宗教心でなければならぬ。

宗教もまたその獨自なる公路をもつ。およそ一切の精神文化は、それ／＼眞にその本質を發現するために獨自のコースを持つが如く、宗教もまた健全にその本質を發現するためには、他によつて碍げられることなく、其の本然の要求のまゝに純粹に深くかつ濶達に押進められねばならぬ。それが即ち宗教的天才の行ける道である。古來幾多の宗教的天才が慘憺たる苦闘を重ねることによつて開拓せられた宗教の道は、歴史と共に常に踏擴げられつゝすでに坦々たる大路となつて我等の眼前にある。宗教心の眞に健全なる發現のためには、我等はまづかゝる本然の公路に沿ふことが必要である。

かゝる「公路」において發現する宗教心は、一方におい

て、現實に對する曇りなき冷嚴なる直視と、他方において、理想に對する動^ゆぐことなき不拔の信賴とを併せ具えるを特質とする。即ち、一面において、存在するものゝ無情に徹し、人間の果敢^{はか}なき限界を諦觀しつゝ、然も眞摯なる懺悔を通じて、翻然として耀く寂光裡に還り來り、永遠の理想實現に献身して止まることがない。深く人間の限界に徹するが故に、目前の成功に傲ることなく、理想と共にあつて常に生きるが故に、あらゆる敗衄に失墜することがない。苦艱において屈せず榮譽において撓まず、常に崇きものと共にあつて、自己生命の意義を見るのである。

従て、かゝる健全なる宗教心にあつては、その擔ふところの社會理想に變質のあるべき筈がない。理想はその實現を見るまで、あらゆる轉變を通じて最後迄その光輝を失せず、堅く把持せられて、それへ献身せらるゝのである。

眞に社會の隆替を擔ふに足る宗教とは、正にかくの如きものでなければならぬ。

——從來、この國においては、民族の將來を卜するに、その血系的素質の如何を以てする論議がしきりと横行してゐた。然し、かゝる唯物的な部面にのみ眼をやるに先立つて、民族のかゝる部面に注意をそゝぐ事が必要であらう。民族社會が眞によく成長し得るや否やは、その底部にあつて之を支えてゐる所の宗教の性質如何によるのである。

反省

東 慈 道

反

古への鏡にまさる紙衣、風の射る矢も通らざりけり。

連生房熊谷直實の歌である。

數ある法然上人のお弟子の中でも、一きは異彩をはなつてゐる彼の生涯は、劇的興味にもられて一そう私の心をひきつけるが、殊に最近、この歌ほどひしひしと胸をうつものはない。

治の妙手がうてず、生産の再開に熱意を示さず、徒らに暴利をむさぼつて恥ぢない彼等だ。世界の民主主義國家に見られる、これ等の道義的行爲が、有難いには有難いが、一種不可解なものに感じられてはゐないだらうか。

進駐軍の放出食糧でどれほど我國が救はれた事か。この敵國に對する道義の發露を上げ政治家資本家から下は開商人に至るまで、なんと解釋してゐるのだらうか。政

最近、どの日本人もきそつて民主主義を口にする。誠に結構なことである。民主主義の言説は巷に氾濫しかしましい。日本が眞に更生する途は、民主主義に徹すること以外にはないのだから、結構なことではあるが、果して、甲論乙駁するほど、民主主義の眞意を把握し、且つ實行してゐるのだらう

か。口頭禪に終つてはゐないか。日本人は移り氣の多い民族だと、或る外國人が評した。事實、我國では明治維新以來西歐の思想、制度など、多くをとり入れたが、一つとして實を結ばず、中途半端で終つてしまつてゐる。結局、産みの苦しみを通して現れたものを、たゞうはべだけ鵜呑みにしたからだ。眞に肉體的になつてゐないからだ。民主主義にしても同様である。形だけ、口先だけに終りさうである。然し、今度だけは、それではすまされない。身をもつてその眞理を體得し、世界の仲間入りをしなければならぬのだ。それ以外に日本の再生する道はない。

民主主義は自由、平等、博愛を説き、個人の權威を尊重する。然し個人の責任が裏づけられてゐる事を見落してはならない。我國が眞に民主主義を實現する爲には、國民の一人一人が身をもつてこれを実行しなければならぬ。封建制の殘滓の中にそだち、軍閥官僚獨裁の政治に災されて、自己確立を喪失してゐる日本人には、容易に身につけられないものばかりだ。個人の自覺がまづなによりも促進されねばならない。

私はあの暗澹たる比島戦線で辛うじて生命をつなぎとめ、終戦直後、飢餓と窮乏の山から下りてきたが、米軍に收容されて以來、——それは約三ヶ月あまりの生活であつた——私の心は新しい世界に直面し、驚きと羨望にみたされて

しまつた。いつはられてゐた米軍の眞價が、誤解されてゐた米人のほんとの生活が、驚きのなかに理解されたのである。輕薄で不作法で享樂的で等々、惡德のかたまりのやうに教へこまれた米人とは、似てもつかぬものであつた。

○

榮養失調の弱りはてた身體をボロの戎衣につゝみ、乞食よりも見すばらしい姿で山から下りてきた私たちであつたが、米軍は溫い友情で迎へてくれた。歩けない病人は自らすゝんで背負つてくれた。瀕死の患者にはすぐ高價な注射をうつてくれた。數へれば際限のない親切ぶりだつた。自分たちの敵兵に示した行動から推して、收容所の待遇を危惧してゐた私たちは、餘りの寛大さにしばしその眞意を疑つたほどである。疑心暗鬼して、あらぬ想像をたくましくした兵もあつた。自己の人格を尊重

してもらふと共に、他人の人格も尊重するといふ、米兵の民主々義的な考へ方が、絶對服従の前には兵の人格など認められなかつた彼等に、さう容易に理解出来なかつたからだ。まして憎しみあひ殺しあつた敵兵に對してである。とちめん棒くふのも無理はなかつた。

比島に於ける我國の軍政は完全に失敗した。行きとゞいた宣撫を實施したつもりでゐたが、それはあくまでも強者が弱者に對する強壓的宣撫だつた。

敵への憎惡、勝者の敗者に對する侮蔑、それ等の感情は米兵には見られなかつた。むしろ戦ひの終つたことを喜び、對等に戦つた好敵手の健在を心から祝福するのであつた。

○

米軍の軍規も私たちには奇異におもはれた。階級の嚴然たる區別、それから生れ出るやゝこしき

を、世界にたぐひない嚴正なる軍規と思ひこんでゐた私たちである。將官級の人が二三の部下と友達のやうに語りひながら氣輕に巡視に來たり、またそれを迎へる方でも、特別な警戒どころか平常と一向かはらず、それぞれ自分の仕事を遠慮なくすゝめ、平氣でぶらぶらその前を横切ることさへあるといふ場景は、解しかぬるものであつた。將官級の巡視と言へば、四五日前から一切の事務を停止して營内の清掃に奔命これつとめ、當日ともなれば、上層の服に身をかためて一時間も二時間も整然と堵列して出迎へ、しかもへとへとに疲れた頃ほひ、目玉一つ動かすことの出来ない不動の姿勢の窮屈な中に、あつけなく終る、うはべだけは頗る手のかゝつた、それでゐて實は非能率的な巡視とは、餘りにかけ違つてゐた。彼等は能率的であり、仕事に對する責任は頗る旺盛で、しかも、上級の者ほ

ど、責任の感じ方が一そう強い。相手の人格を尊重し、互に信頼しあふ民主的軍隊の軍規は、私たちの思慮の外にあつたのだ。強壓的に命ぜられる我が軍隊の仕事は總らゆる面で非能率的であつた。上官は命じばなつしだし、實際の仕事に携はる兵は兵で、不承不承に時間つぶしに動くのみで責任などいさゝかも考へない。上を敬ひ下をいつくしむといふ上からだけの教訓が、すでに誤つた封建的思想を藏してはゐなかつたか。收容所生活の日數がたつにつれ、私たちは反省しあつた。

○

私たちは今日、自由にのびのびと生活してゐるアメリカを始め、民主々義國家の人々が羨ましい。併し、民主々義が成長してきた苦難の歴史を、見落してはならぬ。民主々義が人々の血となり肉となるまでには、幾多の尊い犠牲

がさへげられ、不撓の精神によつて戦ひつゞけられてきたのである。一朝一夕にしてなつたものではない。

試みにアメリカの歴史を見よ

う。英本國の不當な宗教政策に抗して、信教の自由を求め、自己の信仰を護りぬくため、新大陸に移つた清教徒こそ、現アメリカ人の先祖である。移住者の彼等の生活は苦闘の連続であつた。だが、信仰に生き神と共にある彼等は、決してひるまなかつた。むしろ宗教の壓迫から解放され、自己の信仰に生きられる生活に、無上の喜びを感じ、日々の苦闘すら感謝の氣持で一ぱいになるのだつた。彼等はししとして開拓していつた。この宗教的信仰に貫かれた強固な自由の精神こそ、アメリカ今日の繁榮を築きあげた源泉である。

この信仰に裏づけられた激しい開拓精神は、現在のアメリカ人の胸中に脈々と波うつてゐる。進駐

軍の若い兵隊が日曜ごとに教會にぬかづき、日ごと聖書をひもとく敬虔さ、私たちの無宗教的な生活とくらべて、なんと奥床かしい事だらう。

民主主義に徹し、それが私たちの血となり肉となるためには、どうしても宗教の力によらねばならない。眞の自由とは、磨きあげられた人格にのみ與へられるものだからである。かくしてこそ、始めて自己の責任を感じ、他の人格を尊重することができろ。

○

冒頭にひいた熊谷直實の歌の心境に私たちが達してこそ、民主主義は始めて我國に根を下すことができる。自己をみつめて罪深き己が罪性に一切の世間的名欲をすて、ひたすら佛へ歸投せられた法然上人の教へが、今こそ、私たちに眞に味はれねばならない。我國の軍隊の聞くにたえぬ、見るに忍

びない殘虐行爲が、次々にあばかれてゐるが、明治以來の我國の無宗教的生活による悲しい結果である。道義厚く恥を知る國民として聞えたはずの日本人今日の頽廢ぶりも、確たる信仰を持たなかつた處に歸因する。平常は、いかに立派に見える人ですら、確乎たる宗教的信仰を持たない人は、一度窮境にいたるや、もろくも心の落着きを失ひ、人格を失墜するものである。

私は復員して以來、過去のやゝもすれば動搖しがちだつた自己の信仰をおもひ、悔恨の情にさいなまれるとともに、今度こそ、心魂徹して法然上人の懷にとびこみたいと念じてゐる。

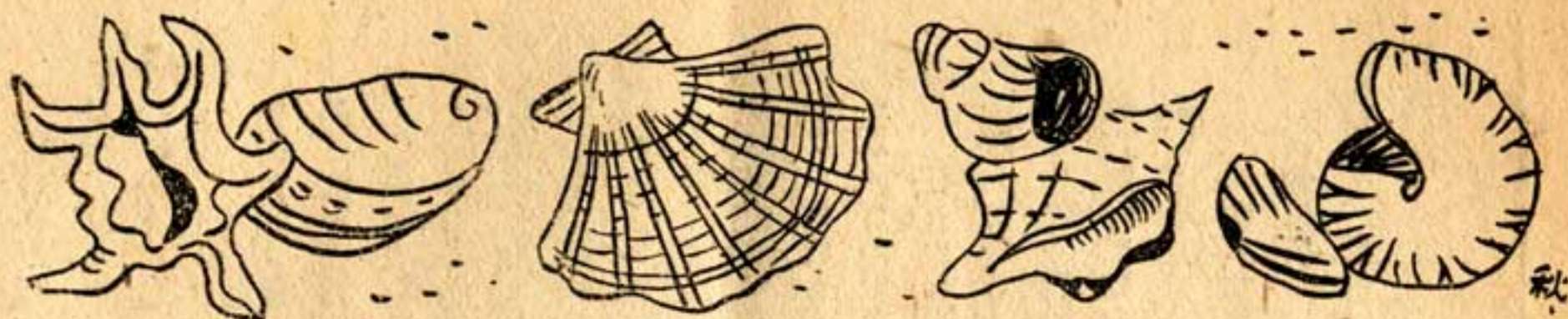
○

今日は日曜である。ラヂオのスイッチを入れてみたら、進駐軍向けの電波がはいつてきた。敬虔な日曜禮放送がはじまつたところ

である。街に出るたびに、必ずいやな思ひをするこの頃、全く珍らしく氣のすがすがする朝である。神に祈る者、佛を念ずる者、教へはちがつても、心は同じ世界に通つてゐる。私の心はのびのびとひるがつてゆく。庭前のさやさやと鳴る柿の葉が、朝日をうけてこよなく美しい。

(七月二十八日)





蓮

の

花

吉田 絃 二 郎

つひ、このころの事である。未知の人が訪ねて来て、わたくしに法然上人の教義について語つてくれと言つた。この人は何でも議論から出發して宗教を突き詰めようとしてゐるらしい。恐ろしく議論好きの人らしい。

「わたくしは法然上人については、勅修御傳をくりかへして讀んだくらゐのもので、何も知らない。併し法然上人のお教としては、一文不知の徒となつて一向にお念佛申せといふたゞそれだけの事であらう」と答へてやつた。

このころは畑の草も二三日見ないと二三寸も伸びる季節なので、議論好きの客などに訪はれると、畑の仕事にさしつかへることがある。

畑の草は繁るに委せて、議論をつゞけてゐたら、何の收穫もないことになる。これと同じやうに議論ばかり追ひかけてゐる人は、心田の草を撿らず、心田の荒れ果てることに氣付かない。

備中玉島の圓通寺の國仙和尚はなか／＼立派な人であ

つたらしい。良寛和尚はこの國仙の會下に在つて二十年の修行をつゞけた。

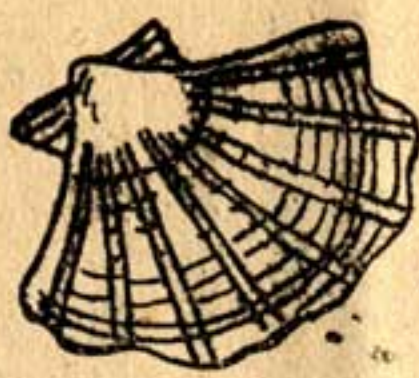
そのころ良寛の同僚に仙桂といふ人があつた。この仙桂は三十年もの間、傑僧國仙和尚の會下に在りながら、坐禪もせず、經も誦まず、宗論を説くでもなく、黙々として畑を耕して、蔬菜を作り、みんなの廚房を賑はしてくれた。

良寛も當時は仙桂を目して、平々凡々の學僧と考へてゐたらしい。青年の覇氣に満ちた良寛の眼中、仙桂などは一顧の價值もない存在であつた。

ところで後年に至つて、良寛は初めて仙桂和尚の眞骨頂を悟ることができた。かれは圓通寺時代に、仙桂を見つゝなほ眞の仙桂を見ず、仙桂に逢ひながらも眞の仙桂を知ることのできなかつたことを後悔してゐる。

仙桂和尚ハ眞ノ道者ナリ

默シテ言ハズ朴ニシテ容かたちラズ



社

三十年國仙ノ會ニ在リテ

禪ニ參ゼズ經ヲ讀マズ

宗文ノ一句ヲ道ハズ

園菜ヲ作ツテ大衆ニ供ス

當時我レ之ヲ見テ見ズ

之レニ遇ヒテ遇ハズ

呼呼今之レニ効ハントスルモ得ベカラズ

仙桂和尚ハ眞ノ道者ナリ(原漢文)

この詩を通して、わたくしたちは仙桂和尚といふ人が、どんな人であつたかといふこともほど想像がつくと同時に、良寛が描いてゐた理想的生活法といふものがかゞはれる。

言論の自由といふところから言論がさかんになることは當然であるが、黙々として園菜を作つて學侶たちを喜ばせた仙桂和尚の行き方の有難さを忘れてはならない。

あれほどの良寛和尚でも、圓通寺時代には、まだ仙桂を見ることのできなかつた。人間は時として、飛んでもない見當ちがひな見方をするものである。それは自分の尺度で一切のものを測るからである。したがつて自分の尺度が短かければ、尺度以上の長いものを認めることはできない。

山に登る人は經驗することであるが、乙女峠から富士

を觀る時、富士は平地で觀たそれに比べて幾倍の壯大さを持つてわたくしたちの胸に迫つて來る。しかもわたくしたちが日本アルプスに登つて、そこから眺むる時、さらに幾十倍の壯大さを持つた富士を感じる。

晩年の良寛和尚は日本アルプスの峻嶺上に立つて富士山を觀た人であつた。

梅雨ころになるとまだ青い柿の實がよく地上に落ちて來る。

「こんなに柿の實が落ちては困る」といつて樹上を仰いで歎息するが、實は柿が青いまゝで落ちるのは、わたくしたちが、脚下を省顧することを忘れたからである。柿の根に施肥することを怠つたからである。

庭の芙蓉が咲いた。去年のこのころも空襲下に、同じ花を見て秋の訪れをしみじみと感じたものであつたが、靜かな花の姿を見れば教へられるところが深い。殊に夏から秋の初めにかけて咲く花には清楚幽韻の氣をたゞへたものが多い。古への佛者たちが佛の坐として蓮の花を選んだことはいかにもとつたる。

池の中の楚々たる一莖の蓮花を見たゞけでも、佛さまはそこにおゐでいることが感じられる。花を見て佛さまを感じることでできない人は救はれないであらう。

小説

ひがみ

瀧川 駿 一一

I

佐川兼吉は天理教の教師である。

前身は左官職であつたが、大酒飲みで酒癖が悪く、仲間でも嫌はれ者であつた。父親がなくなつて、母親が天理教の教師となり、小さな教會を持つやうになると、母親の感化にもよるが、それよりも身體が樂で、生計も案外樂である欲目にかられて、たうとう彼も天理教の教師になつてしまつた。丹波市の本部に三ヶ月ほど行つてゐたが、どんな修行をしてきたのか、歸つてくると殊勝らしく、一かどの説教を勿體ぶつてやつてのけるやうになつた。信者も信者で、心から感心するのだらう、かしこまつて頭をさげたまゝ一心に耳をかたむけ、若先生、若先生と尊稱した。

もともと教養の低い彼である。過去の自分の所行をふりかへり、はたして尊敬されるだけの宗教的人格をきづきあげたのか、傾聴に價する言説をのべるほどの宗教的回心を経たのか、一應反省してみる良心はなかつた。で、骨身をけづる深刻な宗教的惱みも體驗せず、たゞず

るずると過去の生活の延長にすぎないのに、今の境涯を、居ずはりの悪い、くすぐつたいものに感じもせず、信者から尊敬されるのをまにうけて、得々たる優越感にひたりながら、信者をおうように見下すのだつた。と妙なもので、こせこせした左官職の日傭根性は日々うすらいでゆき、長者らしいおつとりした風格が徐々に備つてくるのであつた。俺はえらくなつたんだぞ、信者を信服させるだけの立派な説教ができるんだぞ、自信は牢固として動かず、愈々得意になつて、教祖様の教へを彼獨特の淺はかな解釋でまくしたてた。材料は講談や浪花節からしきりに集められた。まつたく、奇妙な轉身である。

しかし、他所目にも感心なことが一つあつた。それは毎朝のおつとめである。どんな日でも、雨の日であらうが風の日であらうが、嚴冬の肌刺す朝であらうが朝寢を樂しむ陽春の頃であらうが、かならず暗いうちに床をけつて起き、水をざんぶと頭からかぶつて身を清め、どんつくどんどん、太鼓をたゝきながら精魂こめてお祈りするのだ。こればかりは、丹波市から歸つてきて、一日もかゞしたことはない。「あんなに評判の朝寢坊だつた人が、ほんとに感心だよ。これも神様

のおかげだね。ほんとにさ……」

近所のおかみさん達が、こぞつてほめそやすのを聞いて、母親の満悦はまた一入であつた。ぐうたら息子の神妙な轉身ぶりを、たゞ一づにこの規帳面なおつとめ、だけで判断し、これもひとへに教祖様の有難いお導きによるものだ、といよいよ神様のお力におすがり申すのだつた。

教會は母親の異常な努力で、徐々にではあつたが發展していった。

病人があると傳聞すれば、どんなに遠い所でも、一面識もない家でも、相手の人が根負けする迄しつこくおしかけて、慰めるやら病氣平癒のお祈りをするやら、ふてぶてしい圖太さであつた。勿論、彼女の生活や教養が低かつたので、目ざすところも、無智な大衆が多かつた。しかし、金持ちや知識階級の家でも、當つてくだけるの逞ましい心臓で強引におしかけることもあつた。苦しい時の神頼みで、彼等も縁なき衆生ではなかつた。偶然の機會に彼女のとるに足らぬ説教が機縁で悩みを解決し、また祈禱のおかげだけではないのだが、不治の病氣と醫者にも見放された難病が、幾分なりとも快方へ向ひだすと、知識も教養もかなぐりすて、唯一づに神様の奇蹟によるものと信じこみ、他愛なく信者になる上流階級もあつた。宗教的訓練に乏しい日本人であつてみれば、迷信にとらはれる率も多いし、殊に軍人政治家資本家などは、逆境に遭遇すると、淫祠邪教のくひ入る心のすきを多分に持つてゐた。母親は、それをちやんと心得てゐた。

さて信者がふえ、教會の經濟的基礎が確立すると、さらに慾がで

る。教會仲間で押しのきく權威を持ちたいのだ。母親はあれこれとの對策を考へた。どうのつまり、白羽の矢をたてたのは、信者數千を持ち東京でも頗る羽ぶりのいゝ親教會の娘さんを、伴の嫁にもらひうけることであつた。辭を低うし幾度も幾度も足を運んだ。先方では、女學校も出てゐるし、器量もいゝし、相當の家にとつがせたかつたので、再三ことはつたが、あまりのしつこさに、たうとう負けてしまつた。婚禮は教師仲間が、いや親教會さへが、びつくりするほどの豪華さであつた。この機會に、一舉に勢力を教師間にはらうといふ母親の魂膽だつた。

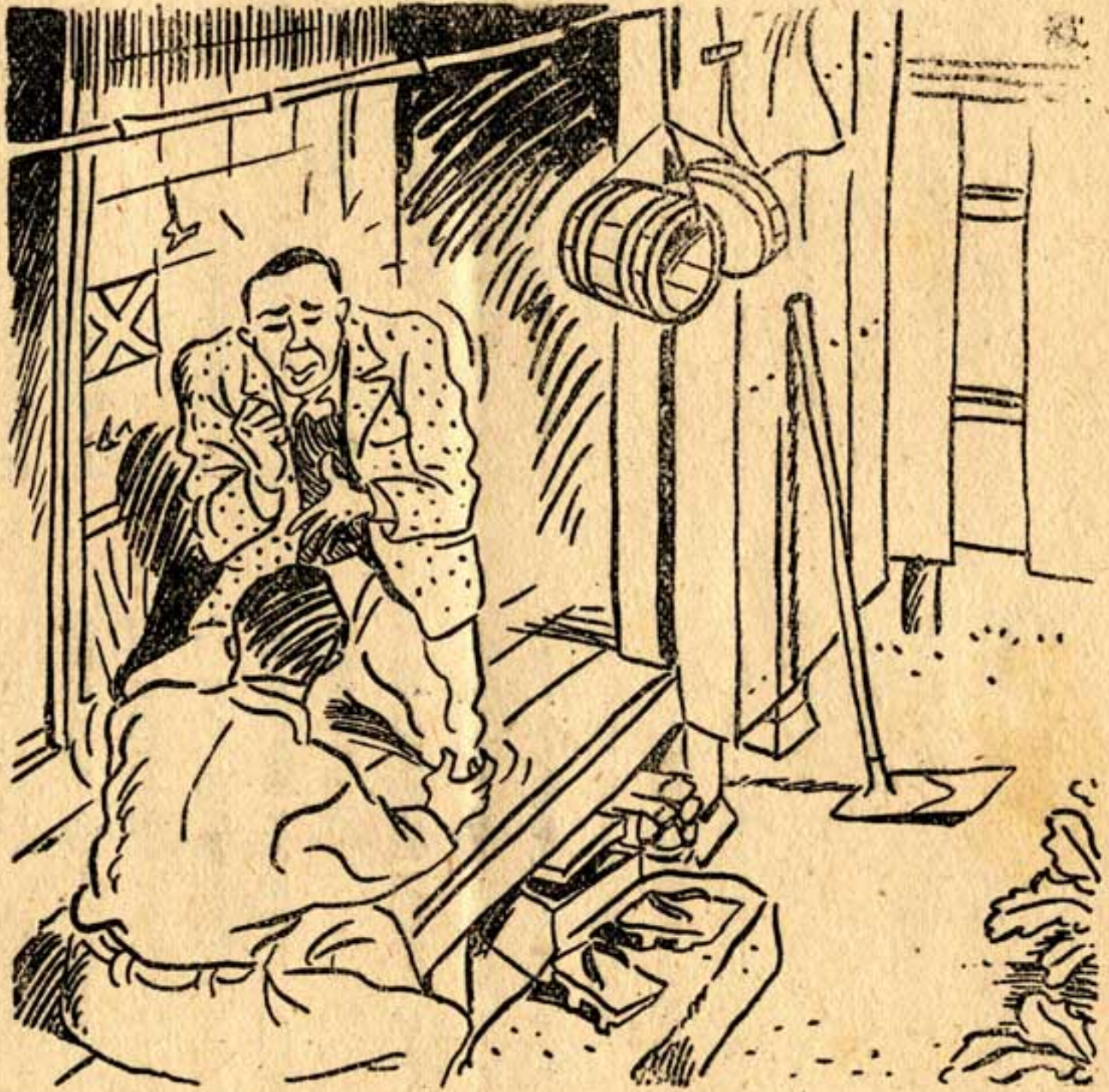
母親の意圖は一應成功したかに見えた。教會仲間では、一かどの顔のきく地位を獲得した。だが、思惑は内部からはづれた。伴がすつかり嫁の尻にしかれてしまつたのである。親教會の威力と教育の差によつて、嫁は伴を自家藥籠のものとしてしまひ、教會内の實權を一手に收めてしまつた。時によれば、教會創業の功勞者たる母親をないがしろにする。母親は信者には、腹をたてるな、不満を言ふなともつともらしい説教をするが、自分の不平不満は平氣でぶちまけた。嫁がにくくてならない。伴がだらしなくてしようがない。伴とて男である以上、嫁の横つ面をはりとばすぐらゐの見識をしめしてくれ、と、内願つてゐるが、さういふ氣概はてんでなかつた。子供の時から腕白で、一人前になつてからも、職人仲間では腕力の強い方で、喧嘩ではまけをとつたためしはなかつたのだが、どうしたことか、嫁が來てから、からつきし意氣地がなくなつてしまつた。嫁の言ふことは唯々

諸々、飼はれた猫同然だった。何か不満のことがあつても、じつと胸の中にしまひこんで楯つかうとはしなかつた。彼も男であるから、胸

にしまひこんだことを、時たま爆発させることもある。しかし、それは酒氣をおびた時に限られてゐた。しかも、くどくどと溺々たる口説を續けるのみで、精一杯の勇をふるつても、柱にだきついて悪口と共にそれを嫁のかはりに打擲するくらゐのものである。母親は情なかつた。柱をぶつ時などは見えてゐられなかつた。嫁をうらみ、はては息子を教師にしたことを後悔し、教會の衰亡を念ずるやうな氣持に沈むこともあつた。そして、愚痴の中に淋しく死んでいった。

II

母親がなくなつてからは、兼吉はいそがしくなつた。妻の指圖に従つて、教會の運営に精魂をかたむけた。妻の威力は一そう加重された。強壓的に彼にのしかゝつてくるのである。つくづく自己の立場を



隣れに感じ、昔の左官時代がなつかしく回想される。すきな酒を飲み、勝手にふるまへたあの時代が……。

「どうして教師なんかになつたんだらう。チエツ笑はせやがる」

戦争中はなほさら忙しくなつた。勝つためだ、神様も助けて下さる、彼はこゝに支柱を見出し、働きがひを感じた。妻から命ぜられないまへに、自ら進んで、宮城前の勤務奉仕や、工場の手傳ひなどに、團長格で出かけた。信者もよく集つた。勝つためのもとによく團結した。そして、それがまた教會を物質的にめぐみ、精神的にかたく結びつけた。

だが、終戦になると、情勢は一變した。勝つものと教へられ神が助けて下さると信じてゐただけに、信者の落膽は言ひやうもなく激しかつた。ぽつかりと、空洞が彼等の胸の中にあいた、傷心は虚脱となり、どうしてよいのか、茫然と焼野ヶ原をあてもなくさまよひつづけた。無秩序と頹廢の世相が現れた。食糧は乏しく、自己の生命

を持続させるのに、手一ぱいになつた。他人のことなど、かゝはつてゐられない。まして教會のことなど。寺とちがつて墓のない教會である、見むきする理由がないのだ。信者の足はしせん、に遠のいた。

兼吉の教會は幸ひ戦災からは免れたが、足の遠のいた信者を、ひきもどすのは容易でなかつた。収入はぐんと減つた。日によつては、その日の家計に苦しむこともあつた。職人時代のずるい根性が、再び頭をもたげてきた。信者の大半が闇商人をしてゐるのを幸ひ、彼等と結託して、食糧の闇買い闇賣りを始めたのは、終戦後、二三月後であつたらうか。朝早くリュックを背負つて出かけ、夜おそくそこそと歸つてくる。札びらの切り方は、頗る派手になる。教會の中には、何時も闇商人が二三人ごろごろして、酒を飲み煙草をぶかぶかふかし、夜中までたか話しに興じてゐる。隣組の人たちが、しせん白眼で見はじめたのも無理はなかつた。評判の朝のおつとめの太鼓は、何時からとなく、とんとひびかなくなつた。たゞその代り、夫婦のはげしいさかひが、時々聞かれるやうになつた。何時もそれは酒で呂れつゝの廻らないほどの亂調子であつたが、妻に對する鬱憤がもう内にばかりとちこもつてをれなくなつた。

お盆の近くなつた或朝のことだつた。戦争中、隣組共同で借りうけた戦時家庭菜園のことで、組長さんと主な人々とが訪れた。兼吉はもう酒を一ぱいひきかけてゐた。

「佐川さん、どうでせう、島もあゝして作らせてもらひ、臺所の手助けにもかなりなつてゐますが、お盆も近づいた事ですし、心だけでも

お禮のしるしをしては……。」

組長さんは、おとなしく話しかけたが、兼吉の返事はとげがあつた。「結構は結構ですが、さうおしつけがましく上から言はれたんでは、一寸文句が言ひたくなりますよ。」

「……、まじい組長さんは眞意が分りかねて、じろりと目をむいた。」

「民主々義の世の中ですよ、一應みんなで合議するのが順序でせう」「えゝ、さうですとも、だから、こちらの奥さんにも、お話しは……。」

「あたしは知りません。聞きません。」

何時も隣組の人から仲間はずれにされてゐる鬱憤がせきをきつた上に、妻が隣組の決議を知らしてくれなかつた事が、ぐつと胸にきた。

「十圓、二十圓の金が惜しいんぢやありませんよ。ものには順序がありますからね。民主々義の世の中つていふのに餘り強制的ですね。」

「うん、だから……。」

「女房に話したつて言ふんでせう。しかし私は知りませんからね。」

「分らない人だな、奥さんが御存知なら、あなただつて……。」

「では、あなた方から妻に言つて下さい、私に詫びるうちに……。」

組長さん達はあきれて二の句がつけなかつた。どういふ氣持でそんなことを言ふのか、解しかねてきよとんとしてゐたが、女房教育もで

きないこんな人間が、信者によく説教ができたものだ、腹が無性にたつてきた。始終妻におさへられてゐる兼吉には、民主々義の世の中は

この上もなく有難いことで、どういふ内容かはよく分らないけれど、平等にふるまへるといふ一事だけで、何かにつけ民主々義を口にしたいし、またこんな機會をかりて日頃の鬱憤をはらしたかつたのである。

信仰相談

阿彌陀佛は何處に在るか

擔當 中村 辨 康

(問)

四月號に「淨土は單なる存在でない」とありましたが、どうもよく分りません。随つて阿彌陀様についても分りなくなつてしまひました。今まで阿彌陀様は人格的な存在として信ぜられその名號を稱へればお救ひに預ると思つて居ましたのに、それがぐらついて來ました。阿彌陀様をどう考へたらよろしいでせうか。阿彌陀様は果して何處に居られるのでせうか。御教示下さい。

(福岡・松本生)

(答)

法藏菩薩の誓願が遂に成就して無量壽國を建立して阿彌陀佛となられ無條件に均しい信と念とで一切の人々を攝取すると云ふ無量壽經の說話は單なる說話ではなくして、天地の道理を示した貴い教であります。一切の現象はどんな些細な事でも現

はるべくして現はれるのであつて、決して偶然と云ふことはありません。原始時代に於て「火」と云ふものが發明されました。或は近世に於て電氣と云ふものが發明されました。それらは決して偶然な出來事ではなくあるべくしてあつたのであり、必然的に發見さるべくして發見されたのであります。謂ゆる法爾自然の道理が顯はれたのであります。法藏菩薩の四十八願及びその願成就もまた顯はるべき必然の道理が、法藏菩薩を通りして現はれたのであつて、それは必ずしも一國王たりし法藏比丘でなくてもよかつたのかも知れませんが、法藏の名が示すやうに、「阿彌陀法」が藏されて居て未だ現はれて居なかつたものを、天地の力に促されつゝ「棄國捐王出家詣佛思惟修行誓願成佛」の經過を踏んで「稱

名往生」の道理が法藏比丘に體驗されそして發表されたもので、その發見以前の姿は「法藏」の状態でありますから、やはり法藏菩薩でなければならなかつたのであります。この道理は他の菩薩には現はれませんでした。ですから他の佛は「阿彌陀法」に就ては完全な發見者でなくその一部分たる菩提涅槃の成就者に過ぎませんでしたから、阿彌陀の名を付けることが出来なかつたのでした。即ち「阿閼佛」は「不動」で「不變」の一理を示すに過ぎなく「藥師佛」は身心の欠陥に對する治癒法を示すものであり「大日如來」は精神界の太陽としての「大光明」を示すものであるやうに、唯だ大宇宙の大生命力の一隅を示すにすぎません。然るに「阿彌陀」とは「無量」と云ふことで、天地一切のありとあらゆるものを一に綜合した名であつて、この中に含まれないものは一つもありません。然かもまた凡てに於て無量なのであります。例へば相に於ても「無量相」であり命に於ても「無量壽」であり光に於ても「無量光」であり力に於ても「無量力」であり人に於ても「無量

衆」であると云ふやうに、ありと總ゆるものを綜合した「全一的」な如來であつて、問題になつて居る「淨土」も結局はそれに即して居るもので心身土と云つて「心即身、身即土」とも云はれるものであります。

それ故存在と云ふ問題に致しましても、淨土と阿彌陀佛とは即して居りますから存在と云ふ考ではいけないのであります。一體私達は悉くを固定存在としてのみ考へます爲に、色々な問題を生じて悩みや煩ひから脱け出ることが出来ないのですが、物は凡て時間的存在であつて固定では居りません。時間的存在とは「一切は變化して推移して居る」と云ふことであつて、それ故にこそ「いのち」でもあるわけであります。いのちとは時間的に見れば推移に外なりません。その上阿彌陀佛は「無量相」であつて一定不變のみのものではありませんし、又「無量壽」でもありますから、常に躍動して居るのであります。それら不變の存在でなくてはならぬとするところに信仰上の誤りがあるのであります。それは信仰のやうに見えては居たが、實は「執着」であつたのであります。またそんなことでこわ

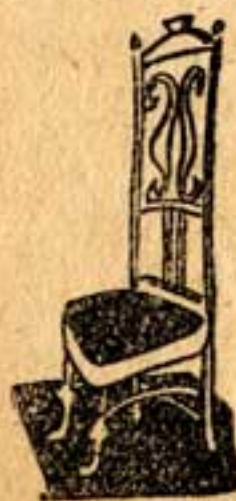
れるやうな信仰では眞の信仰ではなかつたわけで、要するに誤つた概念に執着して居たのであります。

阿彌陀佛は無量相無量光無量壽なるが故にどんな形でもどんなところでもまたいつでも私達の前にましますものであります。それを或る一點に集中するとき禮拜の對象として人格的に擬するお姿にもなるのであります。

觀無量壽經の第九眞身觀には「佛身の高さは六十萬億恒河沙由旬」と云つて居り「佛の眼は四大海水の如く、眉間の白毫は五つの須彌山の如し」と云つて居りますが、それは正しく數量を超越して居るもののことで、云はば「天地一杯」たることを示すものであります。無量壽經には「虛無の身、無極の體」とも云つて居ります。このやうに天地一杯でありますから「無量壽」でもあり「無量相」でもあり得るわけで、それを私達の信仰の對象として意識するには餘りに想像以上であつて考へることさへ出来ませんから、小身を觀じて想像するだけであります。ですからお

木像よりも畫像の方がよく、畫像よりもお名號の方がよいとも云はれ得るわけであります。

然し翻つて思ひますに、こんな穿鑿や理窟ばつたことは信仰には大したものではありません。理窟には理窟を産んでます／＼迷宮にはいる恐れもあります。されば法然上人は「學生骨になりて往生や失はんずらん」と言はれて學問の爲に信仰を失つてはいけなさと誠にめられて居りますから、唯だ一向に一枚起請文の旨を體して念佛に精進せらるゝならば、おのづからやがて道理の分る時もまいりませう。何處までも「南無」と云ふ「自分を捨てゝかゝる」氣持を失はないことが大切であります。他にも二三この御質問に似たやうな御手紙がありましたから一括してこゝにお答へ申しました。御諒承下さい。



編輯後記

◇めぐり來たミヅリ艦上降伏調印一週年に當り、マ元帥は紀念聲明を發し、自由、平等、博愛の三原則は普遍なる原理なりと、重ねて宣明した。

◇過去一ケ年を顧みて、私たちは恥なきを得ない。民主主義國家への轉化が、いかほどなされたであらうか。激しき論議にもかゝはらず舊勢力は末だに溫存し、虛脱と迷惑の中から、立上れずにゐる。

◇現代は不信の時代でもあらうか。戰爭中、國民は裏切られ通しだつた。信じようとしても、信じられないのが人情かもしれない。信頼の念の缺除を責める方が無理かもしれない。しかし、信ずることのできない者ほど、悲慘な救ひがたい人間はない。

◇相互信頼の念なくして、この社會でなにが出來よう。我も人なり、彼も人なり、いや佛教の高度の立場から言へば、悉有佛性であ

る。愚人、惡人といへども、信頼はおろか拜まるべき人である。信頼の念の回復こそ日本再建の基本的鍵である。私たち淨土教徒は今こそ起つて、宗祖の信仰を國民の中に生かし、素朴な純眞な心で、國民の氣持をやはらげねばならぬ。

◇今號も再び合併號とした。しかし、印刷所の都合と遅れた發行日をと戻すための万止む得ざる措置で、これで十月號からは確實にその月に發行し得ることゝなつた。讀者諸賢の御寛恕を切に乞ふ。

◇表紙、其他内容、體裁なども、號を重ねるにつれて、改善に努力してゐるが、讀者の御援助によつて、教界第一の雜誌たらしむべく、鋭意、想を練つてゐる。切に御援助を願ふと共に、御期待あらん事を。

◇眞野先生の巻頭論文は、今日論すべき緊要な問題でありながら、未だ誰一人發言しなかつた必讀の文章。簡潔な文章の中につままれ

た深い着想を、充分味讀していただきたい。

◇吉田絃二郎先生の珠玉の感想を掲載し得たことも、また讀者と共に喜びたい。先生は御身體がいくらか弱られて御不自由がちであるが、御多忙中に早速書いていただき誠に有難かつた。

◇米の大豐作、増配の聲明につき、甘藷の供出好調と朗らかな氣が漸くきざしてきたが、讀者諸賢もこの機に心機一轉、益々自重あらんことを切望してペンを擱く。

(東)

吉田絃二郎著

武藏野記

B₆版
二〇〇頁

定價十三圓(十二圓)

再出版來

初版賣切れのところ、再版が出來ました。殘部僅少ですが、本會にて、お取次ぎします。

發行所 船形書院

東京都本郷區駒込東片町百

淨土 八・九月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和二十一年八月二十日印刷納本

昭和二十一年九月一日發行

(定價一圓六拾錢)

編輯兼 眞野正順

發行人 眞野正順

東京都芝區芝公園淨土宗務所

印刷人 村瀬秀雄

東京都牛込區市谷加賀町一ノ二

(東京)

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園淨土宗務所

振替東京八二一八七番

會員番號B一〇八〇一四

會費 金 二十圓

(送料共)

振替拂込みはすべて三十錢増のこと